



学校だより

いこま

第 10 号

令和 6 年 1 月 17 日

大東市立四条中学校

校 長 長 谷 敦

1995 年 1 月 17 日の記憶

今から 29 年前の話。あの日を知っている先生も少なくなってきました。

当時の朝をはっきり覚えています。午前 5 時 46 分、そろそろ起きようかと思っていた時間でした。生まれて初めて聞く「ゴーッ」という恐ろしく低い音。その時は、まさか地震の前の「地鳴り」だと思いもしませんでした。

「何の音だろう。」と思っている矢先に、今度は強烈な縦揺れが始まりました。地面から突き上げられるような揺れです。経験したことのない揺れ方に、何が起きているのかわかりませんでした。縦揺れの後、連続して経験のない横揺れが襲います。本棚の本は全部飛び出し、色々なものが降ってきたので布団をかぶって頭を守りました。強烈な横揺れは 1 分ほど続いたと思います。

この頃は、今のように携帯電話もインターネットもほとんど普及していません。情報は今のようにスピーディには入ってきません。家を出る前に見たテレビの情報も「大阪、神戸で震度 4」と放送されていました。当時はこの四条中学校で 1 年生の担任をしており、「一刻も早く学校に行かなければいけない。」と、急いでバイクで学校へ向かった記憶があります。余震が続いていましたが、この時点では、被害の状況も伝わってきていませんでした。

朝、生徒たちは「すごい地震だったな。」と口々に登校してきました。担任していた 1 年 2 組の生徒たちも全員無事でしたが、寺川団地は高さがある建物のためかなり揺れが激しかったようで、家の中が大変なことになっていると教えてくれた生徒がたくさんいました。四条中は、本館と新館の渡り廊下付近に少しひびが入り、図書館の本棚がすべて倒れていましたが、それ以上の大きな被害はありませんでした。揺れは激しかったが、大した被害もないと思い込んでいました。

色々な情報が入ってきたのは 1 時間目が終わったころだったと思います。一番ショックだったのは、「長谷先生、大変なことになっているぞ。」と当時の校長先生に校長室でテレビを見せられたことです。電車が倒れ、高速道路が倒れ、神戸の街が燃えていました。まるで映画のワンシーンを見ているような、まったく信じられない状況でした。

忘れられないK君のこと

震災から2週間後に、神戸から一人の転入生を受け入れました。震災直後、大阪府は避難してきている児童や生徒を転入の手続きなしで受け入れていました。K君は、神戸市中央区から避難してきた生徒でした。校区内に祖父の家があるということで、お母さんと妹と3人で大阪に避難をしてきました。あいさつがしっかりできる生徒でした。

K君は神戸で経験した話をぼつりぼつりと少しずつ教えてくれました。きっと思い出すのも嫌だったと思いますが、担任の私に少しずつ話をしてくれました。

町は壊れ、家族で暮らしていたマンションは倒壊して本当に怖い思いをしたこと、奇跡的に家族全員が助かったけど、避難所がいっぱいで暮らす場所もなく、壊れた車の中でずっと生活していたこと、着の身着のまま歩いて大阪に避難してきたことなど、私自身が経験したこともないことを彼は13歳で受け止め、「生きる」ことに前向きに頑張っていました。勉強どころではなかったはずですが、すぐにクラスになじみ、勉強も頑張っていました。

K君が長谷学級に在籍していたのは一か月もなかった気がします。仮設住宅に住むことが決まると、神戸に戻っていきました。今でもK君のことをはっきり覚えているのは、彼から「生きる」ことの大切さ、つらくても前向きに頑張る勇気を13歳の中学生から教えてもらったからじゃないかと思っています。あれからK君にはお会いしていませんが、阪神・淡路大震災が近づくとなぜか彼のことを思い出します。元氣でご活躍されておられるでしょう。

あの時の長谷学級だった生徒が、今保護者として何人か四条中にいらっしゃいます。縁とは不思議なものです。

私たち大人は、時には過去のことを語り継ぐ必要があると思っています。この機会に震災当日感じたことや経験したこと、命の大切さや防災のことなど、お子様とぜひ話しただけるとありがたいです。